

会 報
 2019年5月号
 東京アルコウ会



鹿島槍から、五龍、白馬方面を望む

- ◆5月集会
 - 期日 5月26日(日)PM2:30～
 - 場所 赤城生涯学習館
 - 係 川目、布川
 - 会務、山行計画・報告
 - ◆5月委員会(同日PM1:00～)
 - 係・田村
 - 議題・100周年関連、年間山行計画 他
 - ◆6月集会の予定
 - 6月30日(日) PM2:30～
- ◇お月見山行のお知らせ

今年度のお月見は10月13日(日)、14日(月・祝日)に決定しました。

場所は例年と同じ、日の出山・東雲山荘です

詳細は後日お知らせします。(係 河西)
- 6月山行計画
 - ◇日帰りハイキング
 - 期日 6月9日(日)
 - 場所 未定(新人歓迎山行)
 - 係 久住・窪田
 - ◇日帰りハイキング
 - 期日 6月16日(日)
 - 場所 奥武蔵・鎌北湖周辺
 - 係 岡本
 - ◇日帰りハイキング
 - 期日 6月22日(土)
 - 場所 奥武蔵・大霧山周辺
 - 係 布川

山行報告 山行回数 NO.5668

○2019.4.14(日)

奥多摩・生藤山

=係 布川=

参加者 L布川、三浦(良)、永澤、瀧澤(参加者4名)
◇4月14日(日) 薄晴

天気予報では、夕方から「雨」ということでしたが、朝は薄晴の天気だ。



山道から見た富士山



下

車したJRの上野原駅は、昨年春から南口が開通して、駅前ロータリーや、大型店が出来はじめ、その景色が一変している。駅前からの「井戸行バス」で、終点まで乗った。

バス停で登山準備をしていると、親し気な運転手さんが、「向こうに富士山が見えるよ」と案内してくれた。ほぼ五合目まで真っ白な富士山が麓の桜を背景に映えていた。

登山道は、車道から離れ、軍刀利（ぐんだり）神社の境内を登る。カズラの大樹がその歴史を感じさせてくれる。（1049年建立）今月17日の「例大祭」に向けての準備ということで、地元住民が周りの清掃やしめ縄飾りをしていた。「以前は、お店や屋台などを出していたんだが～」と、ここでも過疎の波は避けられないようだ。

神社の裏手をジグザグに登り、分岐点から「女坂」をトラバース気味に渡ると、三国峠へ出た。ここは、「相模、甲斐、武蔵」の三国が接するところ。縦走路の三国山と生藤山山頂には、すでに大勢のハイカーが陣取って、お昼を取っている。そんなことで、我々は、この先の「茅丸」まで、歩を進めることに。麓では満開の桜等の樹々に比べ、1000m級の稜線では、まだつぼみの状態が多い。斜面の北側には、先月末に降った雪がわずかばかり張り付いていた。

昼食後は、誰にも会わず、静かな稜線を醍醐丸へ。ここから、和田峠へ杉林の登山道を下る。峠には駐車場があるが、静かだ。お店を覗いてみると、オヤジがひとり、所在なさげに座っていた。ここからは、車道を40分ほど歩き、「陣馬高原下バス停」へ到着。心配した雨にも遭わず、無事に予定のコースを踏破出来た。

今回は、初めての先輩「三浦（良）」さんが参加して、いつもとは違った感じだった。皆さん、その活躍していた時期が同じではないようで、そんなアルコウ会の長い歴史の一齣を知る機会にもなった。

(記 永澤)

<コースタイム>

井戸バス停09:15発→軍刀利神社→三国山11:00→生藤山11:30→茅丸(昼食)→和田峠15:30→陣馬高原下バス停17:30⇒高尾駅発19:12

山行報告 山行回数 NO.5669

○2019.4.14(日)

富士沿線・都留アルプス

=係 岡本=

参加者 L岡本、小國 (参加者2名)

◇3月21日(木) 晴れのち曇り

富士急行都留市駅に集合し、富士急急行からペットボトルの水と地図などをもらい出発。川の流れる音が満ちている市街地通り抜け登山口に向かう。路上から真白の富士山が青い空に映える。道の曲がり角毎に「都留アルプス」の案内がある。仕事をしている外国人労働者が私たちに手を休めて挨拶してくれる。登山客にやさしい町である。30人程度の元気そうなおばさんたちのグループが広場で準備体操中、登山口を間違えた私たちに登山口を教えてくれた。

谷村(水力)発電所の横が登山口である。今満開の大きな桜木の並木の急傾斜のジグザク道を登る。横には発電所に通じる直径3mはあろうか水圧管が3本通っている。いきなりのきつい登りに息も絶え絶えになり



ながら、登りきると上部水槽があった。水圧管の入口には格子状の異物除去装置とコンベアの排出装置。水位調節の越流装置が見える。

さらに登って行き、富士山展望台に着いたが、すでに雲が出ていて富士山は見えなかった。しかし眼下には人家が、その向こうには山脈が見える。尾根上の急な坂を下り、岩壁にへばりつくように急な尾根上道を登って行くとアンテナ塔が見える。登りきると烽火台跡、蟻山山頂であった。昔も今も狼煙と電波の違いで通信中継地は同じところである。ここからの見晴らし

は四方素晴らしいが、木々間から見ることとなった。雪を被った山も見える。

転びそうな急な坂を下って行き峠の十字路を通り、再び急な登り坂を登り白木山山頂に着く。30人のおばさんたちのグループに追いつかれ、2人の登山が奇異に見えたのか「下見ですか？」と問いかけられる。繊細な心に傷が付き、別グループがほかの山に登っていることを伝えた。相模原市公民館の「野道会」のグループとのこと、会員は50名ほどで今日は30人が参加しているとのことであった。

尾根上道を下り、また登り長安寺山山頂に登頂し、パノラマ展望台に行く。眼下に人家その向こうに山脈が見える。雲で富士山は見えない。都留アルプスの説明書き看板があった。「都留アルプスは都留アルプス会と都留市とで3年の歳月をかけて完成させた」とのことであった。

さらに下って行き、あと少しで人家に到達しそうになるまで降りた。尾根の横に巨大な水道橋が見え、水道橋の橋脚の付け根まで降りた。水道橋を「ピーヤ」と言うとのこと。ここで尾根は崩され、切通となっている。切通を通る道は水道橋の下を通り山脈と水道橋と直角になっている。水路橋の説明看板では、「鍛冶屋坂水路橋（ピーヤ） ピーヤとは栈橋のことであり、ここではピーヤと呼び、鹿留発電所から谷村発電所へ送水している」とのこと。谷村発電所は登山口地であった発電所であり、その上の上部水槽よりもここは高いのである。かなり降りてきたので、上部水槽よりも低く感じていた。峠であり大室神社の祠、いくつもの石仏があった。また尾根を登って行き天神山山頂に着く。また下り降り切ったところでまた水道橋があった。この導水路はトンネルと水道橋で山脈と並行に走っている。水道橋の下に自動車が止まっており、写真を撮るのに邪魔で不愉快になる。「山ノ神」の祠があり、その前に座るのに打って付けの敷石があったので昼食とした。祠の周りは草刈りをし、掃除をしたばかりで、周りの樹木を使ってしめ縄を張ってある。車から神主装束の宮司さんが出てきた。敷石に腰を降ろしていたのはいかにも神に対して不遜であり、あわてて立ち上がった。宮司さんはニコニコ顔で「今日はこれから祈禱があるので氏子たちが来たかと思った。」とのこと。また座っていて良いとのことであった。写真撮影に邪魔な自動車のこと大声で罵らずに良かった。



長安寺山山頂

また登り、「友愛の森」との看板があり、四阿やベンチがある。さらに登ると尾根の北西側の木を伐採し開けた所に出た。「千本桜植栽地」で網をかぶせた若木が植えてある。高木がなく見晴らしがよい。

さらに登って行く、都留アルプスの最も高い標高713mの頂上に到着。山頂名はなく「遊歩道」の道標に小さく713mの文字があった。また下って行く。今度は尾根道から山腹の道になり、マムシソウ、スミレ、ヤマブキ、モミジイチゴ、キブシ、アケビ、リンドウ、ツツジなどの花が咲いている。ミツマタ群生地に着く、一面が黄色いミツマタの花に覆われている。谷川に下り、一面に緑色の石の敷き詰められた川に沿って登って行く。途中から尾根に登り、尾根を横断し、下ってまた谷を横断し、また尾根に上がる。尾根道を下って行くとうごうごうと川の流れる音が聞こえ、鹿留川が目の下に見える。尾根を下り谷川をまた渡り、尾根に上がり、古城山に登頂。住吉神社の境内を通り抜け、さらに下って行く。集落に出て鹿留川を渡る。川床は黒い岩盤が覆い、水は岩を削って流れている。市街地を通り東桂駅に到着。大月行きに乗り大月へ。大月から高尾へ行き、解散した。

(記 小国)

<コースタイム>

富士急行都留市駅発9:40→登山口9:50→烽火台跡10:30→白木山10:50→長安寺山11:05→パノラマ展望台11:15→水道橋（大室神社）11:25→天神山11:50→水道橋（山ノ神）昼食休憩12:00～12:25→都留アルプス最高峰（713m）13:15→古城山15:20→鹿留川15:40→東桂駅着16:00

山行報告 山行回数 NO.5670

○2019.5.5(日)

奥武蔵・ツツジ山

=係 岡本=

参加者 L岡本、窪田、永澤、小国、吉田、延里
(参加者6名)



ミツバツツジの花

◇5月5日(日) 快晴

参加者6名は全員同じ8時29分正丸駅着の電車で着いた。ゴールデンウィークで快晴の登山日和、駅前広場は催し会場でもあるかのように登山者で一杯である。我々は駅前の正丸橋を渡り国道299号沿いに北を目指したが、他の多くの登山者は伊豆ヶ岳方面に向かったようだ。

駅より20分程先の国道脇に立つ「本邦帝王切開発祥之地記念碑」のところで、向かい側に横断する。横断先の舗装林道から登山口に行けるが、敢えて農道を北に入り、村人に道を尋ねて墓の横から舗装林道に合流した。合流した先に登山口がある。村人は舗装林道が出来て良かったのだが、登山コースは駄目になったとこぼしていた。

登山道は杉植林帯の中の涸れ沢沿いで、かなり急な登りである。一度渡り返して遠巻きに急なジグザグ道を登ると、沢の源頭の先で尾根上にある三田久保峠に着く。急登をひと登りしたという実感が湧く。四分岐の峠から南北に走る尾根を北へ、新緑の自然林の中、緩やかな道を登る。鞍部から登り返すと、杉檜植林帯に変わり、やがて登山道と見間違ふような放射状の4本の作業道と交わるが、道標はない。ここは慎重に尾根筋を逃さずに登る。この先、3度程同様の作業道と交差するので注意が必要である。

杉檜植林帯の緩やかなピーク、コカシアゲ(山名標なし、628m、NHKアンテナ有り)の先は、意表をつく程の滑りやすい急傾斜で、全員ストックを出して慎重に降る。降った先は、丸太の標柱が立つ峠ノクボである。ここからは道は徐々に傾斜を増して、小都津路山(小ツツジ山)直下の登りは厳しく、10分程苦戦を強いられた。小ツツジ山山頂(770m)にはベンチもなく、展望もない。ただ、幹に小さな手作りの山名板が紐で括り付けられ、その横の幹に「ここは小ツツジ山です」と書かれた赤テープが巻かれているだけである。山頂付近には、山名に嘘はありませんよと言いたげに、淡紅色のミツバツツジが新緑に映えて美しく咲いている。山頂で小憩を取っていると、若夫婦(港区在住)が登ってきたので、会員募集のチラシを手交した。

小ツツジ山に続く平坦な道を少し進むと、小岩が多く露出した大都津路山(大ツツジ山)直下の急登になる。踏み跡がはっきりせず、岩や木の根を掴みながらの三点確保で慎重に登る。10分程の苦戦の末に山頂(831m)に着いた。真新しい道標があるが、間違ってツツジ山となっている。道標の杭に手作りの山名板「大都津路山831m」が付けられ、横の幹に赤テープ「ここが大ツツジ山です」が結んである。ベンチもなく眺望も利かないが、山頂の西側には淡紅色のミツバツツジが美しく咲いている。新緑に包まれ、静寂、薫風、陽光を感じながらの寛いだ昼食を摂った(永澤カフェの野点コーヒー付)。これを至福の時というべきか。

大ツツジ山から杉檜植林帯の平坦な道を進むと、登山道の両脇に緑の網が張られた所に出る。多分、この網はツツジの幼木保護のためのものと思われる。この辺



ツツジ山山頂

りの小ピークからの眺望は素晴らしく、浅緑と濃緑が織りなすモザイク模様山並みが手に取るように見える。ここからツツジ山は近い。ツツジ山山頂(879.1m)には道標「正丸駅」「ブナ峠1.8km」「刈場坂峠0.4km」があり、三分岐になっている。山頂からの眺望は良くない。アマチュア無線の愛好家がアンテナを立て交信していた。当初の予定は、ここから刈場坂峠を経由するものであったが、帰りのバス時刻を勘案して、ブナ峠に直行することにした。

ツツジ山から緩やかな尾根を降って奥武蔵2号林道(舗装)に出る。ブナ峠に寄らず300m程手前で、丸山(833m)への山道に入り、ここでも時間短縮策を取った。丸山は三本ブナ山と称していたが、植林帯となったために山頂の形態である丸山になったようである。丸山から緩やかに尾根を降り、ブナ峠からの林道に合流した。合流点からは日向根バス停のある集落まで林道を進む。この林道はブナ峠に通じる旧道を拡幅したもので、かつて峠越えて吾野地域と都機川地域との交流が盛んだった由である。その証の一端なのだろうか、林道沿いに「伝説おそのの墓」の碑、馬頭観音像等の石仏、大きな神木に護られた「砥石の山の神」の社殿などがある。日向根集落に着くと、大きな鯉幟が吊るされていたが、幟の下には子供は居らず、何故か大人達が昼間から酒盛りをしていた。日向根バス停で、ときがわ町営バス(イーグルバスが委託運行)に乗り、越生駅に向かった。最後に、池袋で打ち上げをして楽しい一日を終えた。

今回の山行コースは、昭文社「山と高原地図」のランク付け(マイナーな難路コース)に違わず、急登、急降下の部分が多かった。又、登山道と交差する作業道が多いので、作業道に迷い込まないように注意する必要がある。登山者と出会ったのは、若夫婦と中年単独行者の3人と少なかった。季節も良く、山道沿いの草花談義に花が咲く楽しい山行でもあった。

(記 岡本)

<コースタイム>

正丸駅発8:50→登山口9:25→三田久保峠9:57→コカシアゲ(NHKアンテナ)10:30→小ツツジ山11:37→大ツツジ山12:03~13:00→ツツジ山13:15→丸山14:07→日向根バス停着15:34

随想

山に親しみ山に想う(18)

—韓国雉岳山国立公園紀行一(1)

＝岡本＝

韓国勤務当時、2002年の秋夕(注1)の祭日に雉岳山国立公園内の雉岳山(チアックサン、標高1288m)に登った。雉岳山は、冬季オリンピックが開催された江原道平昌市の南西方向、原州市との中間あたりにある。

以下の本文は、山行より帰宅した日の夜に留守宅に送ったファックス信に若干の添削を加えたものである。

9月20日、21日、22日は秋夕の三連休である。秋夕の前日にあたる20日は、秋夕の祭祀準備で韓国民は忙しい。街中を走る車は至って少なく、多くの店は閉まっているが、祭祀の供物用食材等を揃えるソウルの京東市場は普段以上に賑わっていた。自宅近くのバス停から清涼里駅まで普通1時間程かかるのに、今日は40分で着いた。駅の切符売り場へ急ぐ。5カ所の切符売り場には10m程の列ができていたが、8時45分発の統一号(安東行き特急、10時43分原州到着、3100ウオン(注2))の座席が取れたのは幸運であった。

列車内は秋夕の帰省客で満員。列車の連結部分にも新聞紙を敷いて腰を下ろしている人もいる程である。乗客の身なりは皆んな小ざっぱり。真っ黒に日焼けした顔に背広を着込んだ中年男性を見ると、着慣れない背広を着て久しぶりに故郷に帰省するというハレの場に出る意気を感じられる。化粧の似合わない中年のおばさんも精一杯のおめかしをしている。誰もかれも、秋夕というハレの舞台で何かしら演じるために帰省するのだ。

乗車して列車の出発を待っていると、おばさんが近寄ってきて、友達グループの席が3号車のここらあたりの席なので、2号車の自分の席と替わってくれないかという。韓国では仲間の絆は異常な程である。おばさんが仲間外れになれば大変なので2号車の席に移った。替わった後におばさんと交換した切符を見ると、終点安東まで7400ウオンのものである。自分の切符の行先である原州駅で指定席の客が来れば、立つか2号車に戻ってくることになる。おばさんのところに戻って原州までの切符とまた交換して下車した。最初からおばさんの席の番号を教えてもらうだけでよかったのだ。とんだ茶番を演じた。

時刻表通り10時43分の定刻に原州駅に到着(注3)。駅頭の観光案内所で「亀龍寺行きバスは、近くのセメリ便宜店前のバス停から41番に乗る」と教えてもらったが、セメリを探すのに少々迷った。何のことはない。セメリとはファミリーマートのファミリーのことであった。韓国人の英語の発音は上手すぎる？ 雉岳山登山口近くに着く亀龍寺バス停行きの12時発バスに乗車した。市街近くにある36歩兵師団の広い駐屯地を経由



亀龍寺前の親子

して、12時30分に終点亀龍寺バス停に着いた(700ウオン)。バス停は雉岳山国立公園管理事務所のすぐ近くである。バスの車回しの広場周辺に5、6軒の土産物店と3軒の民泊がある。その内の予約していた一軒の民泊「コンセ」(野鳥の名前)に行った。誰も出てこない。昨日電話予約を入れた際、主人は祭祀の準備で民泊にいないが、着いたら家に電話をくれと言っていたので連絡すると、15分程でおかみさんがやって来た。主人の実家は秋夕を迎える準備で忙しく客をとるつもりはなかったが、わざわざ電話をもらったので受けたと思着せがましい口調で言う。民泊の建物は3部屋にシャワー1室と台所があるだけの建てつけの悪い安普請である。視点を変えれば野趣たっぷりと言うべきか。

旅装を解いて早速近くの亀龍寺に行った。雉岳山国立公園管理事務所亀龍入山切符売場で2600ウオンを払う。領収券の裏面には、公園入場料1300ウオン、文化財観覧料1300ウオンと書かれ、管理事務所長と亀龍寺住持の印が押されている。山岳地帯の国立公園内には重要な寺が存在するので寺に寄らなくても文化財観覧料名目で寺に払わなければならない(注4)。寺は管理事務所の入口から約800m先にある。正式名は、大韓仏教曹溪宗亀龍寺、禅宗系である。667年(新羅文武王6年)に韓国教科書に出てくるほどの有名な僧義湘大師が創建した。名前の由来は、現在の大雄殿の位置に池があり、9匹の龍が棲んでいた、義湘が仏道の方で追い出し、池を埋め立て寺を建てたことから九龍寺と称した。その後九と同じ発音の亀に替えた。大雄殿前には「9月7日水害義捐金の法会」の大垂幕が懸かっており、傍では息子に手をひかれて大雄殿まで上りついた老母が殿舎の前で拝跪し、四方に向かって拝んでいる。韓国では仏教がわが国以上に生々しく息づいているのは確かである。寺院の周りにはドングリの樹木が多い。「養木のためにドングリは拾わないで」の垂幕があるが、お構いなく多くの人が拾っていた。トトリムック(注5)を調理するのであろうか。仏に拝跪するのも、注意書に反して境内のドングリを拾うのも、ともに素朴な庶民の心情であろう。

民泊に戻り、1チャンネルしか映らないテレビを観ているうちに寝込んでいた。2時間程して目覚めるとオンドル(注6)が入っていて部屋は暖かくなっていた。午後

(6 ページに続く)



泊った民宿

5時過ぎ、溪流の傍の小さな食堂「ムルレパンア」(水車)でピピンバップを食べた。素朴な田舎の味だった。民泊の部屋でこの日のメモを書いていると、おかみさんが近くで拾ってきたと言って祭祀用供物の生栗を持ってきた。ただ一人の宿泊者の自分に気を使ってくれているのだ(注7)。民泊のベランダからの眺めは、隣の民泊の屋根が下に見えるだけで、真っ暗闇である。こんな漆黒の闇は見たことがない。視界の端、遠く豆

粒ほどの電球の灯火が一層闇の深さを強調していた。

(注1)秋夕(チュソック) 韓国では旧暦8月15日(中秋節)の日に祖先祭祀や墓参を行う。旧暦8月15日のオンの為替レートは、1円=約10ウォン

(注3)当時コリアタイムと言って、韓国人は時間にルーズであったが、韓国国鉄は定刻を守っていた。日本統治下時代の日本国鉄の伝統が残っていたのだろうか。

(注4)韓国仏教の寺は山岳地帯にあるため国立公園内に有名な寺が存在する。我が国の江戸時代とは異なり、寺が平地に下りてきていない。例えば、伽倻山国立公園の海印寺、俗離山国立公園の法住寺。

(注5)トトリムック ドングリの実で作ったトコロテン風の食べ物。

(注6)オンドル(温突) 薪や練炭を焚いて暖をとる床暖房。床の隙間から一酸化炭素が漏れ、中毒死する事故がしばしば起こった。

(注7)秋夕の祖先祭祀の供物として新酒、松葉蒸し餅、ナツメ、栗、柿、梨などが供えられる。

(つづく)

◆編集後記

総会も終わり一段落ですが、今年度も課題は多いようです。

会報係に復帰して1年たちました。そろそろまとめをと考え、整理していますが……。近いうちに掲載します。
(河西 記)

東京アルコウ会

代表 窪田 紀夫 TEL 0297-73-1237

〒302-0022 取手市本郷1-19-13

事務所 〒180-0003 武蔵野市吉祥寺南町2-21-10

谷口 宅 TEL 0422-48-1303

発行 令和元年5月25日

MEMO